高価な自転車は父の権威の象徴だった
ー実用自転車ー

■「おなごのくせに、自転車に乗ったりして」、「なまいきじゃな、ちっと」

見出しは、坪井栄著の小説『二十四の瞳』で1928（昭和3）年瀬戸内海の寒村の分校へヒロインの新任教師の大石先生に対して、生徒の初めての印象の言葉である。戦前には、自転車は男が乗る乗り物であり、女性が乗るということは、おてんばでハイカラと考えられていた時代である。

自転車に乗れた日の喜び

大学卒の初任給が1万円前後だった1955年（昭和30）頃、自転車は1万5千円ほどもした。高価で高級品の自転車はまだ一家に一台という時代。その一台は父の自転車である。自転車は父の権威の象徴でもあった。ハンドルに掛けられた子供用椅子で、父の自転車に乗せてもらうと、自分も偉いんだという気持ちなった。子供専用車を買ってもらえる家庭は少なく、父の自転車のフレームの三角形になった部分に足を入れ、ペダルを漕ぐ「三角乗り」に興じた。

自転車が高価なため、センターフレームを上下可動する「男女兼用車」があった。フレームの上パイプを下げないときは父が乗り、母が乗るときはパイプを下げたのだ。父の乗る自転車は、「紳士用の自転車」で「実用自転車」の原型である。

■実用自転車

実用自転車には、大きな荷台に重い荷物をたくさん積み、耐久性に優れた頑丈な車体の働く自転車「運搬車」と通勤、通学など乗用として使われた「実用車」（紳士用、婦人用、兼用車）に区別される。乗用といってもこの時代は必ず荷台が標準で装備されていて、後輪のスポーク数は40本、前輪は32本で頑丈につくられていた。

実用自転車　　名古屋郷土二輪館蔵

黒塗りのフレーム、前後の泥除けには手書きの金線や赤線、ハンモックとか飛行機型と言われた大型の皮サドル。幅広のハンドルから鉄の棒を引き上げるブレーキ（ロッド式ブレーキ）、チェーンを泥や砂から保護するフルケース。ニギリ（グリップ）はセルロイド製である。

自転車が一般家庭に普及していくにつれ、頑丈・鈍重な「実用車」から軽量なワイヤー式ブレーキで、フレーム上のパイプを下げた男女同一仕様の「軽快車」が誕生し主流になって行く。東京オリンピックが開かれた1964（昭和39）年には実用車と軽快車の市場比率が四対六で逆転する。今では1パーセントにも満たない。自転車にステータス性がなくなり淋しい限りである。

（富成一也）

実用自転車のサドル（左）と子供シート（右）　　名古屋郷土二輪館蔵